いじめ 生まない

春、胸躍る新学期。でも学校生活にはいろいろなことが起きる。昨年は大津市の中学生の自殺をきっかけに「いじめ」が社会問題になった。子どもたちが楽しい学校生活を送るにはどうすればいいのだろう。いじめを生まない教室づくりに取り組む先生を訪ねた。

まず良い面ほめよう

京都・右京区 川上貴由先生

川上貴由先生は生徒たちを名字ではなく名前で呼ぶ。「結婚しても呼び方を変えずにすみますから」＝京都市右京区、滝沢美穂子撮影

京都市右京区の市立梅津中学校。3月の午後、3年5組では帰宅前の時間を使って、担任の川上貴由先生(40)が「学級通信」を大声で読みあげていた。

この日のメーン記事は、生徒たちが互いの良いところを一つずつ書き合ったメッセージ。「○○さんが見つけた△△くんの一つだけの花！『メガネを外した素顔がかっこいい』」

「おー」。教室は歓声と笑い声に包まれた。

川上先生は毎日、その日学校で起きたことや、生徒に伝えたいことをびっしり書いた「通信」を配っている。保護者にも読んでもらい、学校に関心を寄せてもらうのが狙いだ。「いじめや暴力をなくすには家庭や地域の協力が欠かせませんから」。小さな取り組みの積み重ねがいじめをなくす道だと考えている。

小学生の頃、テレビの学園ドラマを見て先生を志した。夢はかなえたが、現実は、ドラマのようなハッピーエンドの指導なんてできなかった。思うようにいかず、生徒に手を出したこともあった。悩んだ末、他校を訪ね歩き、ベテラン先生の振る舞いを観察した。

黒板はいつもぴかぴかに磨く。机は縦、横、斜めの列をそろえて並べる。学級通信を毎日書く――生徒に慕われている先生は、生徒が来たいと思える教室を作ろうと地味なことをコツコツ繰り返していた。

ハッとした。自分は、生徒を思うとおりに従わせることばかり考えていなかったか。まねをすることから始めた。不登校や暴力が減り、「クラスがうまくいっている」と実感できるまで10年かかった。

5年前、梅津中に転勤。学校は荒れていた。廊下を自転車で走ったり、学校から勝手に出て行ったりする生徒たち。規則を守らせようと、怒っては反抗されてばかりの先生たちに「まず僕らの意識を変えよう」と提案した。叱ってばかりでは先生と生徒が対立するだけ。まずは生徒の良い面をみつけてほめよう。子どもたちが学校に来たいと思えるように。

掃除の時間には《あの隅っこのゴミ、よう気づいたな》、テストが20点でも《この問題、よう解けたな》。生徒との距離はぐっと近づいた。「自分をほめる人を裏切ったりできない」。廊下から自転車は消え、不登校もなくなった。

「いじめるなと押さえつけるより、いじめが起きない環境をつくること。遠回りに見えて、実は一番の近道だと思います」。先生になって18年。理想の指導が見えてきた。

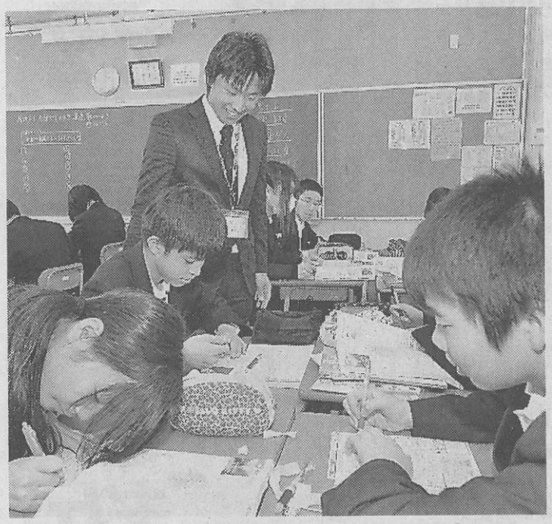
教員異動特集

■いじめを生まないために取り組むべき三つの課題（国立教育政策研究所の滝充総括研究官による）

①規律（きちんと授業を受けさせる）
②学力（子どもが分かる授業をして基礎的な学力をつけさせる）
③自己有用感（「他人から認められている」と実感できる場をつくる）

生徒の声受け止めたい

大阪・寝屋川 菊本大樹先生



菊本大樹先生は学校で最年少の先生の1人。「先輩の先生たちから学ぶことがたくさんあります」＝大阪府寝屋川市、堀内義晃撮影

大阪府寝屋川市の市立第十中学校は、いじめを生まない学校をつくろうと道徳の授業に力を入れている。

道徳といっても「正しいこと」を教え込むわけではない。先生が独自に選んだ物語を読ませ、生徒たちが登場人物の気持ちについて意見を言い合う。先生は、他人の意見を馬鹿にしたり批判したりする生徒には「ダメだよ」と言うが、あとは黙って耳を傾ける。

小野隆校長は「ひとの気持ちに正解はない。いろんな受け止め方があることを学び、思いやりを育んでほしい」と話す。取り組みの成果はまず、先生たちに現れた。「独りよがりの考えを押しつけたり威圧的な態度をとったりする先生がいなくなった」

2年5組の担任、菊本大樹先生(25)は、物語の展開に沿ってあらかじめ考え、生徒の反応を見て授業に臨む。「していなかったらあわてたり、生徒の感想文に「よかった」と書いたりしたりすることまだです。生徒たちんな意見を受けようになりたい。

先生になってびせず、時にはどう教えたらよう？》と生徒ら、一緒に成長しよう。

いじめ起きにくい環境づくりを

いじめは1980年代後半から繰り返し社　子どもの自殺が起きる――。

れたいじめは14万4054件。前年度1年間の2倍を超えた。

安倍晋三首相主導の教育再生実行会議は2月、道徳教育の教科化やいじめ対策

経験もいじめた経験も持つと回答。「いじめっ子」「いじめられっ子」というイメージで特定の子どもだけをケアしても、いじめは減らせないのが実情だ。